

「本当のわたし」をみつける

教育研究所 所長 佐伯 胖

私が米国の大学院に留学した当初、非常にとまどったのは、同級生たちと大学院の講義内容についての「雑談」で、「君は〇〇先生の講義にあった△△についての研究をどう思うのか」と問われて、シドロモドロながらなんとか自分なりに答えると、相手はいかにも不満そうな顔でこういう。「君の話は、何が本当とされているか（What is supposed to be true）の話のようだが、私が聞きたいのは、あなた自身、何が本当だ（What is true）と考えるかを聞きたいのだ」という。これには心底、参ったというしかない。私は長年「勉強」してきたが、「勉強」というのは「（その時代、その時代で）何が本当とされているか」についての諸説、諸理論を調べ、それらを整理して頭に入れること」だと信じてきたし、それを積み重ねて「研究」してきた。「この（まだその領域の初心者にすぎない）ワタシが何を真実と信じるかを語れ」などといわれても、答えようがないではないか。

しかし、考えてみると、欧米ではことあるごとに「あなたの意見」を求められる。レストランでは料理の種類、デザートの種類、コーヒーか紅茶か、などすべて、自分自身の意見で選択させられる（それは幼い子どもに対しても同様）。ところが、わが国では幼稚園のときから「人（他人）に合わせること」、「仲間に入れてもらうこと」ばかりを考え、先生も「みんなと一緒に、同じことをする」ことを求める。わが国の「教育」は、「どうふるまうべきか（What is supposed to do）」を身につけること」であり、「あなたが、個人として、どうふるまいたいのか、どうふるまうべきだと思うのか」は、そもそも問われさえもされない。これは、要するに、自分自身を「三人称的まなざし」でみることを強制されるということである。自分自身を「他人様」のまなざしでみて、「あるべき自分」であるか省察し、「あるべき姿」に近づくようにと、期待され、求められるのである。これでは何が本当か（What is true）は探求できない。

本研究所での「研修」の第一歩は、「（教師として）“どうであるべきか”ではなく、あなた自身、どのような人間になろうとするのか」についての本心を掘り起こすことである。それがみつかってはじめて、子どもを“どうあるべきか”という観点から見るのではなく、子ども自身の心の奥底にある「どのような人間になろうとしているのか」という本心を受け止め、それに自らを重ねて「共にある」ことができるようになるはずである。

（2016年3月31日）